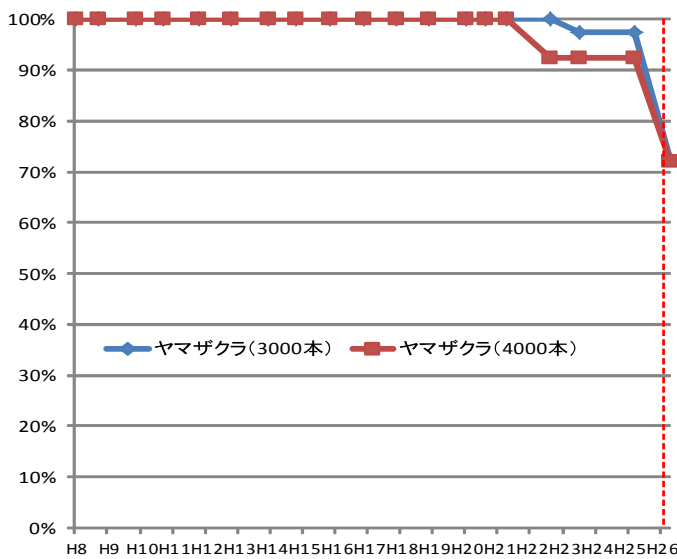


樹種名	ヤマザクラ	
科 目	バラ科	
学 名	<i>Prunus Jamasakura</i>	
分 布	本州（宮城、新潟から以南）、四国、九州、国外では朝鮮半島南部に分布する。	
樹木特性	陽樹であり、丘陵から山地の伐採跡地などの二次林に生育する。暗い環境では成長はしないことから耐陰性は低い。 生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は休眠するが、寿命は短い。 ヤマザクラは同一地域の個体群内でも個体変異が多く、開花時期、花つき、葉と花の開く時期、花の色の濃淡と新芽の色、樹の形など様々な変異がある。	
用 途	街路樹、建築・家具・彫刻・楽器として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	945 本／0.31ha (3,000・4,000 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 バラ科サクラ属の落葉高木であり、乾燥地でも生育するが日照に対する要求度は高い。 ヤマザクラを原種として品種改良された種も多く、葉芽と花が同時に開くので、これがソメイヨシノと区別する大きな特徴となる。 新芽から展開しかけの若い葉の色は特に変異が大きく、赤紫色、褐色、黄緑色、緑色などがあり、裏面が白色を帯びる。花弁は 5 枚で、色は一般的に白色、淡紅色だが、淡紅紫色や先端の色が濃いものなど変化も見られる。 果実は球形、直径が 9~10mm 程度、黒紫色に熟し、果肉は苦い。 樹皮は暗褐色または暗灰色。	  
試験地での様子	ポット苗を植栽し、野兎・鹿による食害が多く発生した。特に、植栽後 1~2 年は野兎の被害が顕著であった。また、樹皮には食害痕から幹の腐朽が発生し、ほぼ過半数の植栽木に痕跡が見られたが枯死までには至らなかった。鹿は葉・芽を食害し、幹の径が 1cm 程度になっても噛み折っているものがあった。これらの被害が多発したため、最終的には鹿ネットを設置することとした。植栽木の成長と共にこれらの被害は減少している。 病害虫による被害は見られず、現存率、成長状況共に良好である。	
被 害	野兎・鹿による被害が発生した。	

ヤマザクラ 現存率



【現存率】

シカやウサギによる被害が発生したが、現存率は比較的高く安定している。

林内の照度調整を図るため平成 22 年度に 4,000 本/ha の方を強めに本数調整伐を実施した。

本数調整伐を実施し、その後の調査木の現存率は 84 % (H 25.6 時点) である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 72.4%であった。

当試験地では、ヤマザクラの他にソメイヨシノ (26 本)、河津ザクラ (6 本)、シダレザクラ (3 本)、八重ザクラ (7 本) が現存している。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

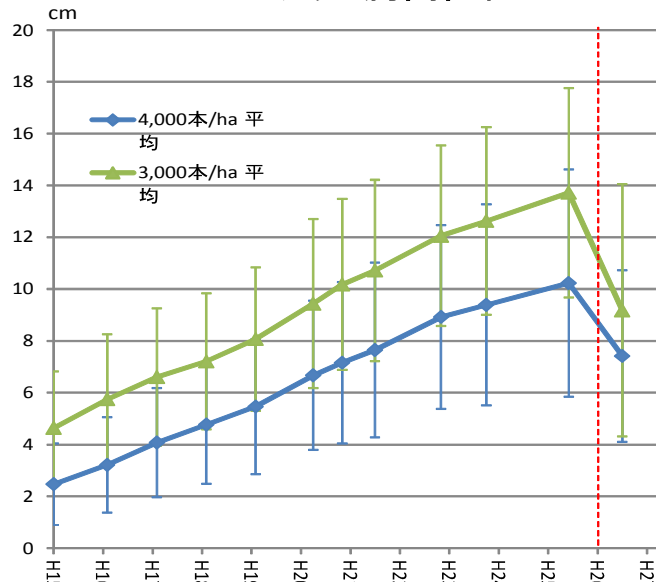
【根元・胸高直径】

3,000 本/ha の方が肥大成長が良好である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均胸高直径は 9.18 cm であり、4,000 本/ha の平均胸高直径は 7.42 cm であった。

※ 赤線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤマザクラ 胸高直径



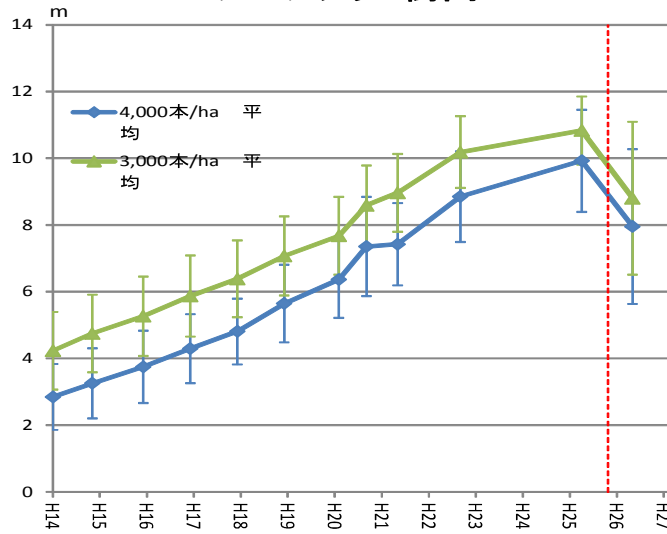
【樹 高】

3,000 本/ha の方が上長成長が良好である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本/ha の平均樹高は 8.80m であり、4,000 本/ha の平均樹高は 7.96m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤマザクラ 樹高



《プチ情報》

材はやや堅く均質で加工しやすく、表面仕上がり良好（光沢がある）なので建築・家具材、器具・彫刻・楽器材に用いられる。樹皮は樺細工や薬用になる。

「吉野の桜」とは、本来この山桜を指すものであり、日本の象徴とされた桜でもある。長寿な種であり、樹齢 500 年を超えるものが見られる。

サクラの属名は日本では長いこと *Prunus*、和名ではスモモ属とする分類が主流だったが、昨今の研究では *Cerasus*(サクラ属)とするものがある。日本では前者、分けてもサクラ亜属(subg. *Cerasus*)とするものが多かったが、近年は後者が増えてきているしかし *Cerasus* とすることで決着した訳ではない。

大峰山系北端の吉野山には約 3 万本のヤマザクラが植えられているとされる。一目千本と言われ、北部の山裾から南の山上へ順に、下千本、中千本、上千本、奥千本と呼ばれている。もちろんもとの自生ではなく、桜が金峰山寺蔵王権現のご神木であるとされたことによる。金峰山寺を開いた役小角(修験道の開祖)が、桜の木に蔵王権現を彫ったことから桜が信仰の対象となり、行者たちは競って桜の苗を寄進する風習がおこった。このために平安時代から多くの桜が植えられるようになったのだそうだ。